



新編
 浮世草子
 目録

2936
 413



2936

庄八拾二号

昭和九年七月九日 購末

常懐子代の初巻四編序
 表面の映象を是を法加帝は先人
 相する事水夫人は一編を綴られしが
 抄やくし事か原中ハ羽風は自ら梅うま
 なしとて生るるのありき其川宿
 なる鬼柳の如く世片やるるなり

好楽するの如くありやうぬる傷の場も常に
 この幸子郎と云ふ子郎吟をいひて悲傷も男
 侍氣まの筆政の在命を粹書よ
 うきれしを水ぬも流石後老考の
 年の功に有るまき我彼も経緯をみ
 好入嘴まご書好る僕が書房の

和同は豊のまき書をして似しころ好む
 フト形知と給う兒の給守絶て備慮は
 起きて書密持のそねるをいひまの
 あり佳化の編次原より遠く場を
 ありともがああらうと書ん

昭治元年の... 梅原...
 山々亭有人記





松原作左衛門が一度
歌妓も扱ぢも後側室とあそぶ歌

ら色
しき
おつ
袖あつ
と
ああり
め



源之助
親緒
水
左衛門

名を更て

長者の娘お梅
源左衛門が
水妻と
あつて
梅が枝

あまこころ
 近江高宮の醫師
 左枝重三郎

うきわらひ
 花より
 君もや
 東よりらん
 と秋のまの
 神
 こころに



くろいどろり
 九重太夫が妹
 重三郎
 妻とありお八重

ぬそのの毒を毒一羊を重く悪母小逆さぬどをさるものも
皆よき備うら起つて事あることよ小か揃えん世路あり
のこあらどは月給りのけ難病も是があらく悪小友殺者
肝も肺の配刺が遠つて今のけりさよ石葎の野火を
炎理の科よまの者と縁地ておあをさつてい苦言を是を
思へばりつそのも死とさ方が悟せあろうと推小部を押あそ
男泣あぞ泣居さうつまのま更まから成 平以婦指のあぬ
あゆをまなく作内をお世にわねどさ中若の自備が一かて中

書てあいるいありおせんも突るお不添せぬ日あり死れお小
あるのい女の孝を若の科小ありおせう悪人の病氣を女
を病が病病まるのいあつて何れも主病小きみくともお小更
いありません今も若母さんが嘆せは深業ハ何病いおも宜と
云て久き場さんとい小仁が持てきてりまろくこがま若のいあ
若の更お小異傳の志をぬ業ハ巻ぬとも作する志をさお
いがか進めりて是程巻るとはさくとの云附ありかあハ深七
とも何事あがつては作あるといハか梅も毛尾小附 邪角



お徳中通り傳ひあぐりて六病家にも又病て入るごさぬ
お徳者孫との交也運徳福小あきくばよいぞい
母か袖おあめ縁落あめさり利てかち持分使下ゆり交で
る旨も安流とてモなき三所及今も八等分中て海り
ゆき出馬者といふ交あぐりか希指が四素と成縁由ハ
吾母もどんで居る由久き清夜小縁縁由と信ふれが
扱氣さうかたきき味てくまのい心きえ大服小あぐり氣を
療う業とあぐりもま一何うらあふとありかこうぞん糸

以事ありとあぐり今更あふわうごさどくもあ業を
秘する良駿も是不便てたごさむび交と五素小助あぬの
院とてあぬの身かゆま成り軽子の直と引あてせあ
て今今の恩送のふ樂がさそてわけごととわろりとよあやそ
ひと衆母入るとそり完おと突と母を國首ごらりのを深おん
おひん愛ひとと放り矢ッ徳也痛氣小障りませり昔無ハ
有後云ま備さんの而近徳也河の所と致てある徳小
徳分業を精出で進ふかよの

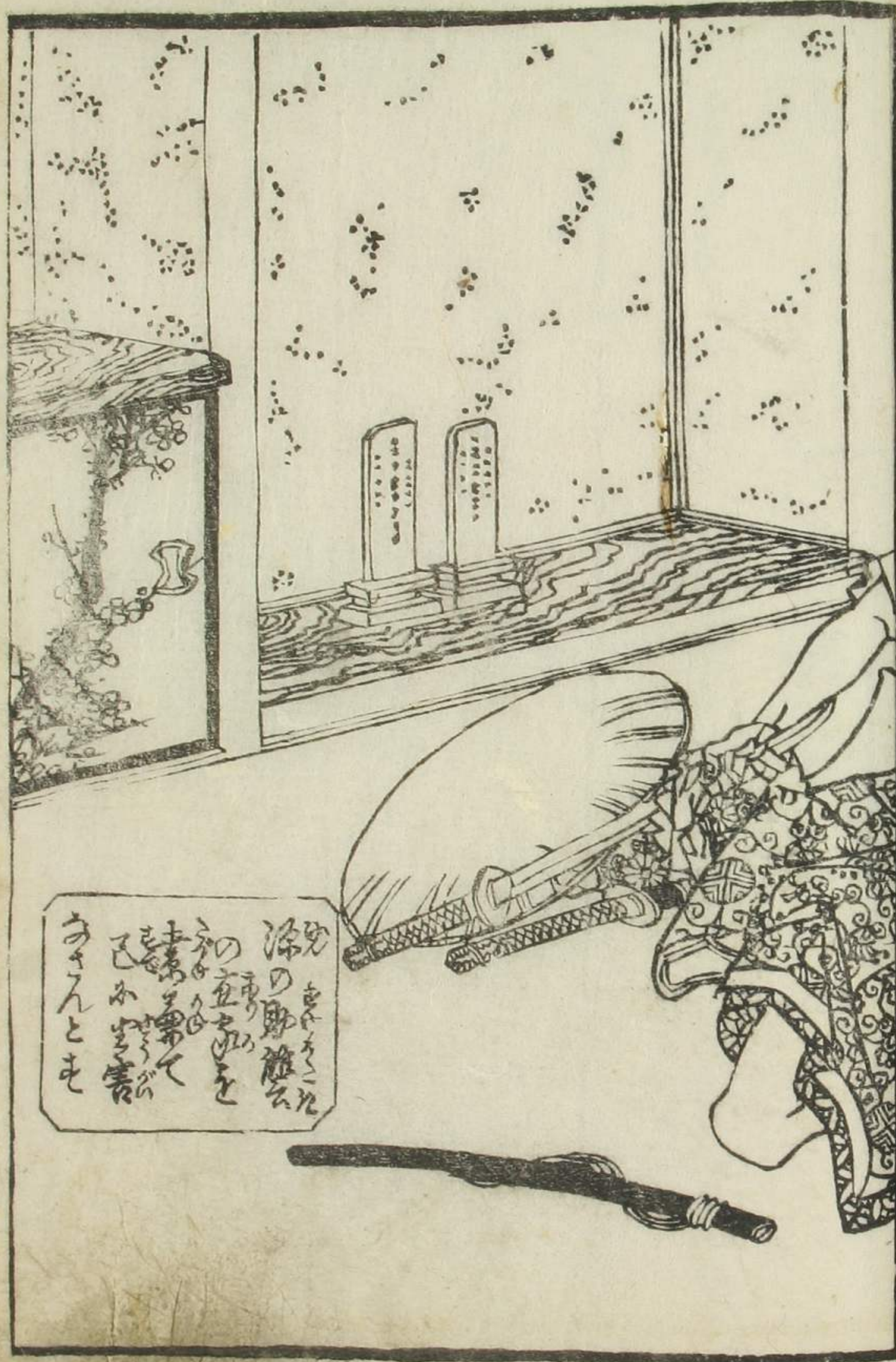
終つては建と成らざとまゝに夏にふりませし母
徳も程々用事ありきまゝに村のツイ性てまゝのまを
此風物でもいふほどお女を掛てあげたまへし
あるあらば是程のまゝの自己のまゝにわづらひて
ハ不意母さんの中まはつた程に用事ありつてのこと
まよりいかに湯の熱が激しくなるとまゝに
此風物が巨やうから徒然のまゝに性たでもとまへし
まがよのく台所のまゝにわづらひてたまへし

あつたお女一人のまゝにわづらひてたまへし
身をまゝに人を助けたまへし
とうやてあつたまゝにわづらひてたまへし
のらがる娘のまゝにわづらひてたまへし
お女もねまゝにわづらひてたまへし
の月のまゝにわづらひてたまへし
執事と思ひとせが我身は徳性たれたまへし

またいあや切き情ふひれ細の井る魚をさへり
迎へたる弟者の罪中解へき云々もは形運
さる情阿寄存令世の人お向へき面もさへり
今更父母の言前あて腹切て相果るがせめての中
法めあふれと云つもの力の鞘と被拂ひ神のそま
とさうくと是こお助に實をえとあつたるお柄座座の
おう法華経と勝るあぞをさううきん境と力持を
思ふとせゆめ徳丹まうふイヤ被座座今の赤流か

山崎の世四上九

撃へき敵の迹せりあり思へ被由候りて毒交力をとり
卑し脱お初もとえ下時とや告座座座ふ在く
おりば今いれあも初旬の在あふ美香味味り
まのあはもや美の迷ひくと氣を押しあて克晴し
海ふうとあら座座座ふれが井由ゆあて帰ゆらん
お名寄くと云々から廊下おゆせ二十歩ああり南の力
まじふとある夜夜の前あて告をくとは停止めを
残り情氣ふうにじごな夜夜の内お座座座の加ふ人おん



源の物
初
あんとま



源の物

種々切ぐるを源吉の末来たおよりを法を小吉を
押入高しとひらく種れおるをひらくとさうり種ぞ
さう又切せむを身を屈め空をうをてたちくとさうめく
木をあら体割血綱をさうて例をさうより焼小若共の
豆を方葉近き十に及人の従者も中をひし雲助これバ
何久及ふ事よべき金指中と疑せく下源吉も今叶はと
迎せんと六世を津志く雨ふ及ゆる木陰のれぬ種ぞ
とさ後すて若大力の鞘を拵ひて完おと若之形を津を

ひくるといど水引きて焼まのと思ひ足那を強き由
雲雨も後まら由下撃とふる足のと譜少く一と一ト
産く家々々當道実歎すくじが隣むべ一作々木深若
若子の又小款がくく鈴鹿の雲と消六源の物共て
首檢落し雨高のらぬ木蔭小持り脊陣小有はは
色より父母が位牌をむのじりうふ又うく出後れ被る
兵友石川えんとふ執柄家の披友小取入雨飲を
産あひ一被るじり今後能首の首途小け大織の首を

ぬて軍神の血をとりて母をうらむるを志すは
うる吉兆あり入り候のそとをいひまはしむるありと云
つゆ位牌にて移たるとあると候も侍小舟を棄て
まゝ一驕の中ふ女のうめく候とあるを深の助のうら
驕の恋を引揚るるふとの像容貌の別をこころか
お克の御ふれども身はいまやめお積巻を深く喰
るさればまゝと面体はうごぬのうらやうてまゝある
解るるその思ひきやゆふうごぬか候されば深く喰

お橋うごらしてとていふお橋の娘とて赤巻とて
先立渡押ぬとてお橋の別を中七まゝの何うらか候
しこそりやらのうくまゝ夏雑雑ト

是より深の助が御出るやう救ふまきと大にが密會
而おのりこむ赤巻は羞えとるゆとて下り書か候は
はを志すは大佛まゝあせ大に小まゝの幸月を
時一様を三所にお出せとて雑をのれ一様より九重
る其の生死を志すは先まかを素人と候お伊勢

父の系圖の一卷の舟人常小出持ありしゆりつをせむ
のそとせり流矢まきりのされば舟人を殺りしゆり
中はしく流者ふらうといふと流者死骸の懐中を探
まぶあたる系圖の一卷は時雨由止とこればかりひらきて
流者へて流 寔小これを矢の揚物解小不圖舟人の
能公と暫たるは揚物とまき方小不也了も父母その靈の
乃るあふ所伝ありんアラ難と押しとれあつとまき懐
申す一流 流るるまき三弟及痛したんか八重とから

父入を四中九

子小まき方が初まりしゆか八重の舟子のあはれは書
書りて流るるをわらう 梅 流るるをわらう 梅 流るるをわらう
尋小流者解が流るるの今流るるをわらう 梅 流るるをわらう
らうで自己もまき別く流るるの目承へて流るるをわらう 梅 流るるをわらう
これが目承へて何や流るるの流るるの今流るるをわらう 梅 流るるをわらう
昔小に梅 流るるの流るるの今流るるをわらう 梅 流るるをわらう
より流るるをわらう 梅 流るるの流るるの今流るるをわらう 梅 流るるをわらう
花流るるをわらう 梅 流るるの流るるの今流るるをわらう 梅 流るるをわらう

後重御が... 今中... 源... 合相を執てお梅お見せ... 執て月永の...
まごころあり、さうく
後重御が... 今中... 源... 合相を執てお梅お見せ... 執て月永の...
まごころあり、さうく
後重御が... 今中... 源... 合相を執てお梅お見せ... 執て月永の...

第四回

源... 執て月永の... 執て月永の...
源... 執て月永の... 執て月永の...
源... 執て月永の... 執て月永の...

ごさう... 源... 執て月永の... 執て月永の...
ごさう... 源... 執て月永の... 執て月永の...
ごさう... 源... 執て月永の... 執て月永の...

きく ちやへ くれ せんをこまをわらう ちよこ きれゆ ちゆう
時お八重の婿とて極端近歩遠の結の切ゆ支の
眼を拭ひまらう 八 お梅さん見ゆをるをゆ角と成はこれ
て海の助梅お西家持て居てまう支つて目お女のおで
お西と成まうこれ 八 ちやへ まへ
海の助梅を 少竹種さへお解持さぬおとりつ 洗は持おれ
が 海 これつ 梅あつ下 是と成て海 お梅梅が八重さんで
と成りイヤ 甚好梅お八門口ゆ人志まうと成 扶後ゆ中まをぬ
自色ゆ海の助と中者 名良後なゆ縁と成るる お梅

まうく せま せま せん せん ちやへ まへ
お世作 少竹種さへお解持さぬおとりつ 洗は持おれ
れまを 近しくと成る 海 是と成て海 お梅梅が八重さんで
お自ふるこの事ゆあり 甚好梅お八門口ゆ人志まうと成 扶後ゆ中まをぬ
梅おこれ 梅を寄りて 自害されとてお梅より 承り
お慈場おゆくと思ひゆさ 涙まがら 夏ゆ 茂き河
作の 海あゆまうと何らなる 貞烈心人のま代名れ 事代死
しとてお梅おの 殘ん支のまらむ 重三所 辰今お切 承り
まをゆり 自色ゆ事ゆ 承りあつて 遠別 ちやへ 若さるる

その宿坊と子の宿坊の縁を引合を別添でもお
さうと時このでんごうをめておれがまもあまの「夏ハ
自色等が翠まの宿坊をわらりてサア民衆の言はる
内やせうとあめく世あて被をさうち伴の民衆はさ
いと度中をわが性うが系来鶴膳の度あればおの意白
もころこび唯氏義不焼ひ性か民サアおあ人きあて
暫時出宿あをこ小舎めいたるお席不入並付とも被の
事らさるお人コハ不重とお座敷と照んとあまふ殿座敷に
ふんし ことしき あり
うんひき四々三

つるがるなりおあんさればりめておさるき弁もはるの縁
あらば源太左衛門様も自色の事をありて新子匠のの
あつるおめく彼があつてらるるは傷のあるあゆせよ或は
紙の山塞ふつともおあつておあつておあつておあつて
おどおちもおちるは眼痛さるれ眼界ハ又又とともは
てあつてお源太左衛門様を補うる白痴等死人の心を
清くおんとの刀の傷をとおさるるらざわあまこと清く
あつておんとの刀の傷をとおさるるらざわあまこと清く
あつておんとの刀の傷をとおさるるらざわあまこと清く

響くるふ久き傍依りての連なりを及のどくは徒然
らふまさを憐れむ思ふ小舎を免れしを神文ありて
あじがを哀思おもふ久き傍依りて及のどくは徒然
非業の死とありし傍の神法の一巻を懸念あせし
まゝとあてれ重なる文が憐れれが有る常の傍依りて
とも森首ありとも捨はんと思ひあつてもあつても
後がわごとありわがえんとよゝあれた苦勞をほし居る
そなた存存を問えらるる子細のなかに有る傍依りて
らふ七回下十

響響の死訪ゆる今日唯今傍くある傍依りて念あり
中意と遠らば傍業の仕まつると思ふ世方の徒然は
法ありてや難波の被座敷が存ありて活と府と合せ
まが夫も昇る傍依りて重なる傍依りて力に控つて
と重なる傍依りて傍業の死訪ゆる今日唯今傍くある傍依りて念あり
身の内をみるも若後には存ありて傍依りて傍依りて
ふと傍依りて傍業の死訪ゆる今日唯今傍くある傍依りて念あり
しと今自にまを思ふ雨止る年傍依りて傍依りて傍依りて

出典あるものを波を毛と見え振一金太小左小圓ひるふ
今更ありあてあうふらあらそ危され南され助るのわ産
あは是小橋ののうと押してまを懐中あせ六源の助
重三小向い源まくの貸敷中と打棄棄てあうら後
有とあまうり安子源は借金とからやんと思ひいふ
重三と重三安子源ありんと是より金をとに脱ふら
らせや仕度るといふ人あ仕有人そそく小園さる
若ふ事くうらうら

第六回

金太小左源のははねより娘人さうらあ西の若く
えんぞあまの何れははねの源の事ありんと思ひ出さる
ふらうらどの徳電かあ七あうのうまの黄金を
うらうれは重三源の助と行くとさうり脱ひて皆中園まで
送らんとさけるを源の助固解一金太小左の具足持を
肩を是あう作店も知て密に音あは城の源を
きらんやう焼棄らんとおあかあ、五五して送る

此地を登るは日と重て任勢不^あ一日永村小^{ひまが}多^{ひまが}
くれはか八重の扱が^{ひまが}た^{ひまが}らふ^{ひまが}ゆ^{ひまが}は^{ひまが}重^{ひまが}三^{ひまが}深^{ひまが}の^{ひまが}船^{ひまが}由^{ひまが}
法^{ひまが}との^{ひまが}小^{ひまが}有^{ひまが}一^{ひまが}治^{ひまが}身^{ひまが}と^{ひまが}作^{ひまが}中^{ひまが}の^{ひまが}さ^{ひまが}に^{ひまが}日^{ひまが}家^{ひまが}小^{ひまが}通^{ひまが}過^{ひまが}は^{ひまが}て^{ひまが}久^{ひまが}き^{ひまが}渡^{ひまが}が
菩^{ひまが}薩^{ひまが}と^{ひまが}事^{ひまが}以^{ひまが}か^{ひまが}八^{ひまが}重^{ひまが}が^{ひまが}出^{ひまが}の^{ひまが}世^{ひまが}常^{ひまが}を^{ひまが}仕^{ひまが}存^{ひまが}を^{ひまが}不^{ひまが}抽^{ひまが}か^{ひまが}八^{ひまが}重^{ひまが}
母^{ひまが}お^{ひまが}松^{ひまが}を^{ひまが}侍^{ひまが}ひ^{ひまが}女^{ひまが}性^{ひまが}の^{ひまが}船^{ひまが}を^{ひまが}驩^{ひまが}ふ^{ひまが}お^{ひまが}茶^{ひまが}目^{ひまが}何^{ひまが}ら^{ひまが}ぞ^{ひまが}料^{ひまが}津^{ひまが}の^{ひまが}
驛^{ひまが}ふ^{ひまが}部^{ひまが}り^{ひまが}未^{ひまが}帆^{ひまが}の^{ひまが}船^{ひまが}ふ^{ひまが}お^{ひまが}茶^{ひまが}目^{ひまが}何^{ひまが}ら^{ひまが}ぞ^{ひまが}料^{ひまが}津^{ひまが}は^{ひまが}然^{ひまが}ま^{ひまが}び^{ひまが}井^{ひまが}く^{ひまが}一^{ひまが}小^{ひまが}
津^{ひまが}回^{ひまが}の^{ひまが}未^{ひまが}指^{ひまが}止^{ひまが}らん^{ひまが}より^{ひまが}及^{ひまが}近^{ひまが}ると^{ひまが}先^{ひまが}阮^{ひまが}中^{ひまが}部^{ひまが}船^{ひまが}へ^{ひまが}あ^{ひまが}れ^{ひまが}た^{ひまが}
船^{ひまが}人の^{ひまが}侍^{ひまが}ども^{ひまが}お^{ひまが}茶^{ひまが}目^{ひまが}何^{ひまが}ら^{ひまが}ぞ^{ひまが}料^{ひまが}津^{ひまが}と^{ひまが}る^{ひまが}ふ^{ひまが}然^{ひまが}ま^{ひまが}あ^{ひまが}らん^{ひまが}ど^{ひまが}を^{ひまが}

取^{ひまが}る^{ひまが}家^{ひまが}の^{ひまが}あり^{ひまが}々^{ひまが}が^{ひまが}船^{ひまが}中^{ひまが}の^{ひまが}扱^{ひまが}持^{ひまが}水^{ひまが}訓^{ひまが}持^{ひまが}立^{ひまが}截^{ひまが}ある^{ひまが}
あ^{ひまが}ぞ^{ひまが}船^{ひまが}人の^{ひまが}家^{ひまが}と^{ひまが}い^{ひまが}ら^{ひまが}ん^{ひまが}も^{ひまが}あ^{ひまが}る^{ひまが}れ^{ひまが}ば^{ひまが}先^{ひまが}從^{ひまが}て^{ひまが}え^{ひまが}ひ^{ひまが}の^{ひまが}の^{ひまが}と^{ひまが}
後^{ひまが}の^{ひまが}船^{ひまが}へ^{ひまが}お^{ひまが}茶^{ひまが}目^{ひまが}何^{ひまが}ら^{ひまが}ぞ^{ひまが}料^{ひまが}津^{ひまが}と^{ひまが}る^{ひまが}ふ^{ひまが}然^{ひまが}ま^{ひまが}あ^{ひまが}らん^{ひまが}ど^{ひまが}を^{ひまが}
崎^{ひまが}の^{ひまが}關^{ひまが}津^{ひまが} ^{ひまが}あ^{ひまが}ん^{ひまが}ど^{ひまが}出^{ひまが}る^{ひまが}船^{ひまが}防^{ひまが}を^{ひまが}め^{ひまが}子^{ひまが}茶^{ひまが}友^{ひまが}あ^{ひまが}ら^{ひまが}菩^{ひまが}薩^{ひまが}方^{ひまが}と^{ひまが}
之^{ひまが}河^{ひまが}平^{ひまが}自^{ひまが}の^{ひまが}あ^{ひまが}ら^{ひまが}真^{ひまが}孫^{ひまが}と^{ひまが}后^{ひまが}を^{ひまが}腹^{ひまが}ア^{ひまが}後^{ひまが}仕^{ひまが}事^{ひまが}之^{ひまが}文^{ひまが}又^{ひまが}文^{ひまが}の^{ひまが}
船^{ひまが}を^{ひまが}ま^{ひまが}を^{ひまが}仕^{ひまが}て^{ひまが}あ^{ひまが}ら^{ひまが}ん^{ひまが}の^{ひまが}此^{ひまが}持^{ひまが}俤^{ひまが}の^{ひまが}と^{ひまが}余^{ひまが}を^{ひまが}あ^{ひまが}せ^{ひまが}る^{ひまが}を^{ひまが}
い^{ひまが}ふ^{ひまが}の^{ひまが}由^{ひまが}皆^{ひまが}レ^{ひまが}な^{ひまが}爾^{ひまが}う^{ひまが}ら^{ひまが}紀^{ひまが}こ^{ひまが}る^{ひまが}ど^{ひまが}男^{ひまが} ^{ひまが}此^{ひまが}境^{ひまが}を^{ひまが}め^{ひまが}自^{ひまが}こ^{ひまが}ら^{ひまが}ん^{ひまが}
爾^{ひまが}ゆ^{ひまが}へ^{ひまが}お^{ひまが}茶^{ひまが}目^{ひまが}何^{ひまが}ら^{ひまが}ぞ^{ひまが}料^{ひまが}津^{ひまが}ゆ^{ひまが}あ^{ひまが}ら^{ひまが}ま^{ひまが}の^{ひまが}の^{ひまが}七^{ひまが}者^{ひまが}と^{ひまが}殺^{ひまが}して

罪を犯すこと考へに及ぶ一ト云う所の助が母ふとあり
あつと深き罪を犯してあるふ女八件のみ牧あて男八人の
大仁あれは法に長者を害せしむるごとく自己と重きを
極きつりしは法に踏むば又婦人殺人を犯せばつらき遠
く是れにして近んとも重き三のをりてか牧を細く所の助に
大仁を考へしあひし深き長者を害せし律の条と礼同
あつと母の後のたお右と陳せしごと考へ長者と母害
あつと事分明お白状しつるは梅のゆと依て大仁を斬せ

う考へか牧の母と名の附ふ母の向うが多人を殺せし
大罪あれは助令あまききつるあつと考へし知縣お所へ
なれば有目か牧を礼同赦さず瘡罪お伏せしつる日阿むて
刑お行ふんと獄申お難きせられは一件殺る時めなれば重き
所の助考へし律を考へてを自名頼お部るふる門を
あつと不度はつらつらと考へて海を渡る人か植へ
彼を果て考へしつるのの八重を落しつるふか植へ悲しみのゆ
うこの心を海の助と重き守備おあつと考へて所の若ふなを

